

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2003-11

発行日：平成15年11月9日
発行元：計画・交通研究会
〒102-0083
東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
TEL=03-3265-1774 FAX=03-3221-5489
E-mail = easts@sa2.so-net.ne.jp
Homepage =www008.upp.so-net.ne.jp/keikaku-kotsu/

目次

Opinion	1-2
魅力的な地域景観づくりへの期待	
News Letters	2-10
事業報告・活動報告	
Announcement	10-11
研究会・催事の御案内	
Publication / Documents	11
刊行物・文献資料	
Backyard	12
事務局通信	

Opinion 魅力的な地域景観づくりへの期待 小柳武和

我が国の近代都市づくりの始まりは、明治初期に建設された銀座煉瓦街に代表されるが、それは西欧モデルの模倣であった。そのモデル展開の手法は明治、大正、昭和と引き継がれ、日本全国みな平等の国策のもと、町の個性、地域らしさ（アイデンティティー）といったものが失われてしまった。

一方、昭和30年代後半からの高度経済成長期を経た日本は、世界でトップクラスの経済力と物質的な豊かさを得た反面、自然破壊や公害などの環境問題、精神的豊かさの欠如、創造性の衰退に気づかされることとなった。そのようなマイナス面への対応の必要性は、バブル崩壊後の低成長時代における施策のあり方や生き方を議論する中で、ますます強く意識されるようになった。この動きは、遠い昔に産業革命という経済成長期以降に生じた多くの都市問題への反省から、生活環境重視型の国造りに方向転換してきた西欧諸国の流れと共通するところがある。高度経済成長の復活を夢見てきた日本もやっとその方向、すなわち生活の質を重視する成熟社会に向かって舵を取らなければならないことに気づいた。そして、今また、大先輩である西欧諸国に教をを請う時が来たと思ふ。

1年ほど前になるが、イタリアからのお客

様を陶器で有名な笠間に車で案内したことがある。その際、混雑する国道を避けて、里道を走ることにした。未だ藁葺き屋根の残る里山の集落に差しかけたとき、そのイタリア人は「素晴らしい！」と感嘆の声を挙げ、このような場所をもっと見たいと言い出した。急ぎの抜け道行の積もりが、結果的にのんびり遠回りの笠間行になってしまった。

そんな農山村風景に日本人は慣れっこになってしまい、普段はほとんど意識していない。だが、彼らの価値観は違うのである。私が、イタリアで目新しく感じた中世の町並みは、イタリア人にとって在り来たりの日常景に他ならないが、彼らは、そんな日常景が地域の個性を創り、国際的にも通用するアイデンティティーとなることを既に知っている。例えば、イタリアでは農村景観や地域の歴史・文化に着目した環境保護法（Galasso Act 1985）に基づく地域風景計画といった施策を展開し、それらの施策が、アグリ・ツーリズム（農業観光）など農村地域の資質を活かした観光事業の発展につながり、農村地域の活性化に寄与している。他のEU諸国も同様である。私を夕食に誘ってくれたヴェネチア生まれの男が、出身地の歴史、文化などを熱く語り、そこが如何に美しく魅力的かを誇らし

げに話してくれたことを思い出す。

折しも、国土交通省が外国人旅行者の訪日促進をねらった「グローバル観光戦略」(H14.12)を策定し、その一つの戦略として、歴史、文化、風土など地域の特性を活かした魅力ある観光交流空間づくりを展開しようとしている。また、それと関連して、「美しい国づくり政策大綱」(H15.7)をまとめ、国も本腰を挙げて、美しい国づくり、魅力的な地域景観づくりに取り組もうとしている。景観研究に携わる私にとって大変喜ばしいことである。

しかし、国を挙げての景観づくりは、ややもすれば、銀座煉瓦街に代表されるような西欧標準モデルの模倣に終わる危惧がある。地域景観づくりが西欧モデルのイミテーションづくりにならないようにしなければならない。西欧諸国から今真似るべきことは地域景観、特に日常景を大切に作る心であり、そこ

に価値を見いだす見識である。

地域景観づくりの目標は、都市施設のデザインによく見かけるような表面的で場当たりのなお化粧ではなく、地域の自然や歴史、文化と人々の生活が融合し、時間が経過するに従って、自然も人々の生活も生き生きと光り輝いてくる姿を実現することといえる。そのため、地域における景観づくりは、総合した地域づくりと連動し持続可能な施策として展開することが肝要である。

最後に、中村良夫先生が、茨城県古河市の古河総合公園の計画や設計に携わった功績で、このたび、文化景観の保護や管理を目的とした顕著な活動に対して贈られる「メリナ・メリクーリ国際賞」(ユネスコ、ギリシャ政府共催)を受賞されたことを、この紙面をお借りしてお慶び申し上げたい。

(計画・交通研究会正会員/
茨城大学工学部 教授)

News Letters

事業報告・活動報告 □

■2003年9月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅱ講・第8回)

日時：平成15年9月10日(水)17時～19時

場所：計画・交通研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題：第5章 観光行動論

第 講・第8回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係4名、「当て塾」関係9名(塾長を含む)計13名であった。

今回は、「第5章 観光行動論」についてで、観光の第一主体(観光者)の行動について、分類、特性などが解説された。

【講義概要】

1. 観光行動の大別

観光行動は、通常の観光(専観光)と兼観光に大別できる。兼観光は、用務で訪れた本人が用務完了後にその地(国)の文化を鑑賞したりするものと、用務に直接関係のない同

伴者が訪れるものがある。後者の例としては、国際会議で“Ladies program”を組むことなどがある。ビジネスだけではコンベンションを誘致できない。訪れた人々を楽しませる興味の持てる国(地域)でなければならない。

2. 観光行動の原理

観光行動は、人間の余暇行動であり、文化行動の一種で、第一主体(観光者)の居住地から離れていることが特徴である。ただし、どれだけ離れていれば観光かということは決められない。また、観光地の地元の人が友人を観光施設へ案内するような場合、地元の人自身は観光客ではないと言うだろうが、観光施設側は二人とも同じ客として扱うように、観光かどうかは厳密には決めにくいものである。

人は誰でも自分自身の観光観(俺はこうしたい、これを見たい)を持ち、誰でも観光論(一言)を述べる。しかも、それを観光の真髓

と思いつつ語る識者も多くいる。それも一理あり、それが観光というものだと思う。

ここで、yを観光出力、興味とし、xを観光入力、aを個人係数とすると、 $y = ax$ の関係で表現できる。(養老孟司「バカの壁」)日本人は、このaのレベルが低いようである。

観光はありのままの姿を見せるものであるから、宿泊施設などは造れても“観光”は造れない。この意味では、観光開発は本来にはないのかも知れない。北海道は資源を食いつぶして開発してしまったが、これは本来の観光開発ではないのである。

3. 観光行動の分類

観光行動の分類は、余暇活動の分類が基本になり、次のような行動がある。

1510一般、1511休養・散歩

1512娯楽・ギャンブル、1513レクリエーション

1514スポーツ、1515教養、1516コレクション

1517創作、1518社交、1519奉仕

娯楽(飲む=錯覚、打つ=勝負、買う=ピク)は観光につきものである。最近、観光地のピンクが減少しているのは、女性が観光の主役になってきているからである。

コレクションについては、人は物を集める習性があり、土産品が重要になる。

創作では、ねたを仕入れに行く旅や、場所を変えて創作する旅がある。絵画や陶芸を楽しむ旅は旅行商品にもなっている。

こうした分類を参考に、様々な観光行動を当てはめていきながら、分類を充実させていくことが必要である。

4. 観光行動の特性

(1) 発生：観光行動の発生には、余暇と労働、所得と消費、情報の多様化という三つの主要素と移動手段が関わっている。また、満足することによって再発生する。それがリピーターである。兼観光という形の発生もある。

(2) 基本型：観光行動の基本型として、ラケット型(回遊)と単目的地型(リゾート、温泉、スポーツ・・・)がある。

(3) 集中と分散：観光行動には、集中と分散

がある。観光施設の計画段階に、十分配慮する必要がある。

注) 鈴木忠義著「観光・レクリエーション計画」

(彰国社,1984)の総括編(PP.3~104)を参照

(文責:「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

■2003年9月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅱ講・第9回)

日時:平成15年9月24日(水)17時~19時

場所:計画・交通研究会会議室

講師:「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題:第5章 観光行動論(つづき)

第 講・第9回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係4名、「当て塾」関係13名(塾長を含む)計17名であった。

今回は、「第5章 観光行動論」のつづきで、観光資源の分類と評価、観光行動の特性について解説された。

【講義概要】

はじめに

観光行動と観光資源を考える前提として、次のようなキーワードの整理が重要である。

行動:総括的、抽象的、種目・・・ } 未入稿
活動:個別的、具象的、競技・・・ }

資源:可能性を含む。(見られないものもある)

対象:資源+人工(道路、駐車場、展望所等)

(見られるようになっている)

計画・設計論等では対象を扱う。

5. 観光資源:大分類・中分類・小分類を考える

観光資源の大分類は、下記のようなものである。

〔自然資源〕15分類

山岳/高原/原野/湿原/湖沼/峡谷/滝/

河川/海岸/岬/島/岩石・洞窟/動物/

植物/自然現象・温泉

〔人文資源〕11分類

史跡/寺社/城跡・城郭/庭園・公園/

歴史景観/地域景観/年中行事/歴史的建造物/

現代建造物/博物館・美術館/興業

概ねこのような分類でよいと思われるが、ディズニーランドのような施設は興業とし、

新しい資源の分類を検討していく必要がある。

6. 評価のランク：誘致力・魅力度

資源評価は、計画を作成する場合などは誘致力であり、ユーザーからみると魅力度と言える。

観光資源の評価として、下記の特A級からC級までの四つのランク区分がある。

特A級：わが国を代表する資源でかつ世界にも誇示しうるもの。世界遺産を含む。

A級：特A級に準じ、その誘致力は全国的。

B級：地方スケールの誘致力。

C級：主に県民・周辺地域住民の利用。

C級の下に、D級がある。コミュニティレベルで大切にされている資源などで、郷土史家などは大切だと言う。このように、誰がどのような項目で評価するかによって、評価は異なる。

ここで、特A級の資源など日本人が一生に一度は訪れたいと思う資源は、1億2千万人の人口ベースでは年間150万人程度が訪れることになる。近隣諸国からの来訪が増加すれば、それ以上が予想される。このため、開発には、超長期的な観点でアクセスを考えるなど、十分な環境への配慮が必要である。尾瀬などは、現在のままでは失われてしまう。

評価においては、調査・分析・評価そして総括（総合化）が必要である。総括とは、開発のイメージを持って計画段階に引き継ぐことで、隣接や資源の見せ方、保存の仕方までの検討を評価に含めることが重要なのである。

7. 観光行動の特性要素

観光活動は、対象に関連する場所を一時的に専有する（実体験）。したがって、利用（専有）時間が問題となり、容量、利用回転率などが重要になる。設計・計画論としては、資源性が毀損されず、持続的・育成的な開発が望まれる。

一時的な専有には時間的・空間的な変動がある。この変動には、政治・経済・社会、季節、休暇制度、天候など様々な要因があり、今後の重要な研究テーマである。

その他、発生メカニズムの変様、行動圏の拡大、諸外国の変容、流行などの特性要素があり、これらについても今後の研究が期待される。

(1)変動：年的変動(政治・経済・社会の異変)

シーズン・休暇（長期） 休日・祝祭日・平日、特異変動（天候）

(2)発生メカニズムの変様(所得・余暇・情報)

(3)文明による行動圏の拡大 - 選択の自由

(4)諸外国の変容

(5)情報：流行、ドラマなど

（文責：「当て塾」東京事務局 野倉 淳）

■2003年10月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅱ講・第10回）

日時：平成15年10月8日(水)17時～19時

場所：計画・交通研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題：第5章 観光行動論（つづきの2）

第Ⅱ講・第10回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係5名、「当て塾」関係10名（塾長を含む）計15名であった。

今回は、「第5章 観光行動論」のつづきの2回目、前回分の第5章の7についての補足及び項目の追加があり、続いて、8として「人間の観光志向 - 計画論へ」について解説された。

【講義概要】

第5章（観光行動論）は重要な章であるため、今回、更に続けることとした。

7. (6) 行動圏（誘致圏）

前回、7として「観光行動の特性要素」を解説したが、(6)として行動圏（誘致圏）を追加した。この行動圏については、距離と来訪率、距離と活動、距離と旅行規模という観点がある。

さらに、「距離」には、空間距離、時間距離、意識距離、経済距離があり、それぞれの観点から行動圏を研究していく必要がある。

8. 人間の観光志向 - 計画論へ

ここまでは、観光行動（活動）と観光資源（対象）の分類及び特性に関する項目を解説してきたが、これらを計画論につなげる際には、人間の観光志向を理解する必要があり、好奇心、リズム、ドラマの三つの観点が重要である。

(1) 好奇心

人は、様々な好奇心を持って観光に向かう。

その誘因（目的）として、自己啓発、鑑賞、レクリエーション（気晴らし）、あこがれ、信仰、保養（骨休め - 対労働）などがある。最近では、無目的（outing）の場合もある。（第1章参照）

好奇心は、準備（あこがれ）、実施（出会い）、整理（思い出）という旅の三段階のそれぞれでイメージを膨らませる。口コミや新聞・雑誌の記事などが、その手助けをする。

また、はじめて、only oneといった最優性、特異性を持った資源（自然 - 創造）に対して強い好奇心が働く。

(2) リズム（≡対比）

人は、社会、環境、時間、気象などの中に、様々なリズム（対比）を感じ取る。このリズムによって好奇心がそそられる。観光地では、人に好奇心を持たせるために、どの様なリズムを生み出すかが重要である。

対比には下記のようなものがあるが、観光地でこれらを活かす例として、人間社会については、蝸集 - 孤独（集まりたい、だけど一人にもなりたい）のリズムを生み出すことなどがある。空間・環境では、大 - 小のリズムを活かしたものとして遊園地の乗り物のコーヒーカップなどがあり、スケールを変えてファンタジックな世界を演出している。時間では、朝 - 夕のリズムとして夜間と翌早朝にイベントを行うことがある。その結果は宿泊増につながる。気象では、雪景色（モノクロームの美しさ、バックが単純化）の活用などがある。

リズム（対比）の例

- 1)人間社会：労働 - 休養、拘束 - 自由、緊張 - 弛緩、文明 - 野蛮、蝸集 - 孤独 等
- 2)空間・環境：人工 - 自然、都会 - 田園、狭小 - 広大、豪華 - 質素、騒雑 - 静整 等
- 3)時間：過去 - 現在 - 未来、昼 - 夜、朝 - 夕 等
- 4)気象：春 - 夏 - 秋 - 冬、晴 - 雨、晴 - 雪 等

(3) ドラマ（時間芸術）

旅は時間芸術であり、ドラマに例えることができ、下記のような要素が重要である。旅行商品は、これらの要素を活かしていかに関心あるドラマとして仕立てるかがポイントになる。

ドラマに関する演劇理論から“旅行理論”を生み出せたらよいと考えている。

ドラマの要素

- 1)situationとsequence
（5要素の組合せ、時間と空間）
- 2)意外性
- 3)期待
- 4)音楽（リズム - メロディ - ハーモニー）
- 5)舞台芸術
- 6)回遊

（文責：「当て塾」東京事務局 野倉 淳）

■2003年10月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅱ講・第11回）

日時：平成15年10月22日(水)17時～19時

場所：計画・交通研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題：第6章 観光の産業構造

第Ⅱ講・第11回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係2名、「当て塾」関係8名（塾長を含む）計10名であった。

今回は、「第6章 観光の産業構造」で、多岐にわたる観光と産業の関わり方、分類、それらの調査・分析の必要性などについて解説された。

【講義概要】

はじめに

観光の産業構造を考えることは、汎観光の第二主体（受地側）と第三主体（観光企業）からみた様々な問題を提起することである。

ここで、観光事業は公的な立場の観光施策、観光企業は民間サイドからの観光施策という区分を行う。公社・公団などによる中間サイドからの観光施策も過去には多く行われてきたが、これらが大きな曲がり角にきている。

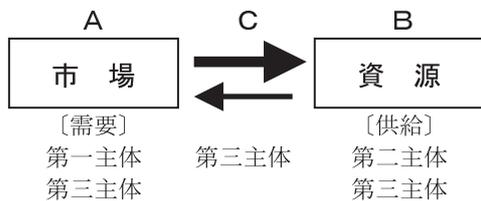
1. 観光の成立と事業・企業の関わり

(1) 観光の成立

観光の発生モデルと発生の空間は、次図のように示される。第一主体（観光者）の対象への接触により観光は成立する。そのためには、財とサービスが必要になる。そこには

様々な企業の存在が必要となる。

図一1 観光の発生モデルと発生の空間



(2) 財とサービスが必要とされる空間

観光の事業（公的）と企業（私的）の財とサービスが必要とされる空間は、次のようである。

A空間は市場（第一主体の居住地）で、必要品が供給（製造・流通）される。B空間は観光の対象、興味地域・地区・地点で、資源＋開発が行われる。C空間は移動空間・手段である。

(3) 事業・企業の観光専用度（％）

A空間は、市場であると同時に観光地でもある。その最大の例は東京である。ここで売られるスキー用品などは100％観光用である。自家用自動車は、日常用でもあり観光用でもある。都市ホテルは、観光目的にも利用される。

B空間は、観光地であると同時に市場でもある。その例は京都である。貸切バスは、ビジネス目的にも利用され、リゾートホテルはビジネスでも利用される。

C空間は移動手段・施設であるが、それ自体が目的化していることがある。観光専用度の高い道路や、鉄道の看板電車などもある。

このように、各空間に純粋な観光用と兼観光のものが存在しており、観光が様々な形で産業と関わっていることが示される。

(4) 総仕上げ

以上のことから、「観光は、まちづくり、地域づくり、国づくりの総仕上げ」なのである。その意味では、生々流転と言える。しかも、様々なライフサイクルの複合体でもある。

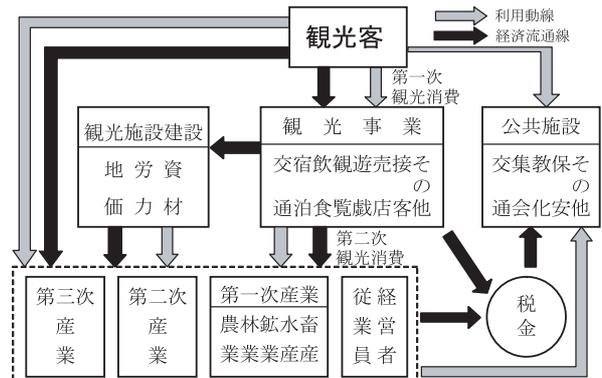
2. 観光のための産業の種類

観光に関連した産業は、極めて広汎にわたる。「観光の学と術の体系（中分類表）」（講義資料P.37）の「4．観光開発各論」から「9．観光経営」の分類が参考になる。

3. 関連学問分野の開発に期待

下図は40年以上も前に作成したものだが、これを詳細にした観光産業連関が必要であり、きちんとした調査を行って欲しい。観光経営学などについても、今後の研究・開発に期待する。

図一2 もの・かね・ひと・しくみ・こころ(文明・文化)の流れ



(鈴木忠義:「観光開発をどう考えるか」日本観光協会、1961.3)

(文責：「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

■2003年9月 那須地域視察旅行と定例研究会

日時：平成15年9月19日(金)～9月20日(土)

行程：

9月19日(金)

那須塩原発10：15「貸切バスにて」

那須野が原公園・サンサンタワー

いまどき、こんなところがあるのか？

芦野 石の美術館

庭と館の世界のデザイン賞受賞

余笹川 工事現場

未曾有の洪水とユニークな復旧（現地担当者の解説）

サンノーブル別荘開発

優良な別荘開発

道の駅「明治の森」・青木邸

国指定文化財・明治の元勲 青木周三邸、ヒバの並木が圧巻

ホテルサンバレー那須着17:00頃

那須で一番元気なホテル。

9月20日(土)

・9:00 - 11:00 ホテル会議室にて

【定例研究会】

テーマ「人間に学ぶまちづくり」

講師：鈴木忠義 先生

11：30 地方の元気な遊園地 リンドウ湖ファミリー牧場。民事再生法で「あて塾」も協力。

15：00頃黒磯駅にて解散

以下の参加者の紀行文と定例研究会報告を掲載します。

(1) バスにて那須野が原公園へ

9月19日(土) 那須塩原駅より那須野が原公園に行き、まずはサンスタワーに登った。東京タワーの1/10ではあるが、高さ33mのタワーからは現在は凍結しているが国会移転候補地として一番適していると評価を受けた、ほぼ千代田区と同じ広さの広大な土地を見渡すことが出来た。天気にも恵まれ、公園の緑が光に映え、とても心地よく感じた。

(2) 道の駅「明治の森・黒磯」にて旧青木家那須別邸を見学

道の駅「明治の森・黒磯」で青木家別邸を見学した後、昼食をとった。

旧青木家那須別邸は、とても興味深い展示が建物内でされていて、別邸へと続く並木通りは素晴らしく、当時の馬車で駆けつける光景が想像できた。また、道の駅は観光客のみでなく地元の人々も来て、お茶をしたり、散歩をしたりしているのが印象的であった。

(3) 道の駅「東山道・伊王野」を見学

サケの産卵場を見学し、ウグイの稚魚を見た。水のある道の駅はとても休まる憩いの場だと思った。

(4) 「石の美術館」を見学

石と布のコラボレーションを行っていて、光との組み合わせによりとても素晴らしい空間を作り上げていた。定期的なコラボレーションや演奏会などの新しい手法は斬新的なものだと思った。

(5) 余笹川を見学

余笹川の河川改修事業に関するビデオを移動の車内で見た後、実際の場所を見て改めて洪水のスケールを肌で感じた。

(6) 別荘地を見学

管理している会社の方に案内をしていただき、車内で各自質問をしながら見学した。セキュリティも行き届き、冬には除雪車も入るそうで、年中住まれている方がいるのにも納得した。将来はこんな生活ができたらと、夢を膨らました。

(7) ホテルにて

中庭の温水プール、何種類もの檜浴槽温泉を堪能し、その後ドイツの方、学生さんなど様々な参加者の皆様とともに有意義な食事を楽しんだ。また、ホテルの夜のイルミネーションはとても幻想的であった。

今見学会を通して感じたことは、都心から自然豊かな那須まで数時間でアクセスできる利便性は、大変魅力的であるということであった。「(株)オリエンタルコンサルタンツ都市・地域部 加藤政哉)

■2003年9月 定例研究会

日時：平成15年9月20日(土)9時～11時

場所：ホテルサンバレー那須 会議室

講師：「あて塾」塾長 鈴木 忠義

演題：「人間に学ぶまちづくり」

那須地域視察旅行の2日目の午前中に、宿泊先のホテルの会議室で定例研究会が開催された。

鈴木先生の著書「人間に学ぶまちづくり」(平成15年3月、(社)九州建設弘済会)をテキストとして、人間の本質に学ぶまちづくりの考え方について講演が行われた。(*文中及び図表中のページは、上記著書の対応するページである。)



余笹川災害復旧記念碑の前で

【講義概要】

はじめに

我が国は、明治この方140年間、追いつけ追い越せで前走者の後追いを続けてきており、先頭を走る訓練が不足している。また、学問分野の蝸壺現象(公共哲学10巻)があり、学問への構えがうまく育たなかった。このような問題意識をもち、人間に学ぶ重要性を考えてきた。

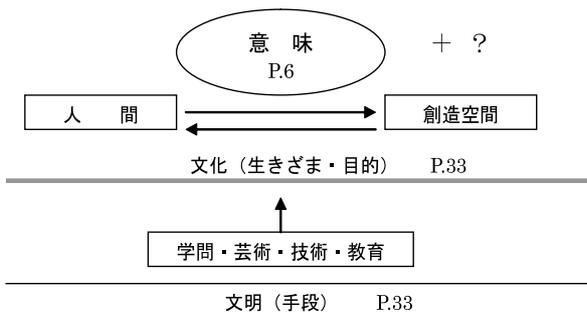
“人間は意味を糧として生きる動物である”(菅野盾樹:「事典哲学の木」)と言われるように、人間にとってどのような意味があるのかという人間との関係を考えることが重要である。

「人間に学ぶまちづくり」は、人間にとっての意味をどのように学び、どのようにまちづくりに活かすのかについて概説したものである。

1. 意味は文明により変化する

文化は人間の生きざま、生きる目的である。これに対して、学問、芸術、技術、教育などを支える文明は、人間が生きていくための手段である。人間とモノや環境との関係は人間と文明(創造空間)の関係であり、その意味は文明が進歩すれば変化するのである(図-1)。

図-1 文明と文化、意味の変化



定例研究会風景(那須)

2. 20世紀文明の構造

20世紀の文明は、超マイクロ(医療機器、ナノテク等)と超巨大(巨大ダム、長大橋、超高層ビル、宇宙等)という両極端の技術も進歩した。また、その変化の速度(ダイナミズム)は著しく、21世紀はどうなるのか想像し難い。このような時代であるから、人間と文明(創造空間)の適応(意味)を真剣に考える必要がある。

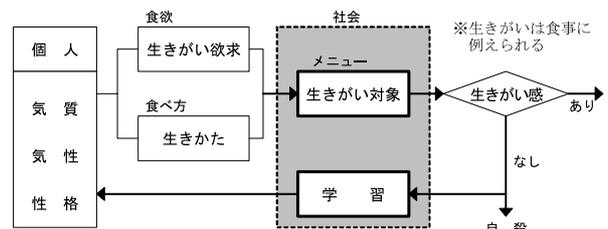
3. そこで人間に学ぶ・・・健康と生きがい

まずは人間について学ぶ必要がある。人間の喜びや生きがいについて学ぶことが大切である。

(1) 喜び、生きがい(P.44~51)

人間の生きがいの成立は、図-2のように食事に例えて説明できる。生きがいの欲求は食欲、生きか方は食べ方、生きがいの対象はレストランのメニューである。メニューに食べたいものがあれば食欲は満たされる。しかし、メニューに食べたいものがないと、時として食べることを止めてしまう(自殺)のである。

図-2 生きがいの成立モデル(P.47)



(2) WHOの健康の定義(P.43,44)

人間は、健康でなければ生きがいを感じられない。この健康について、WHOは、“健康とは肉体的にも、精神的にも、社会的にも完全によ



鈴木忠義先生(那須)

い状態・・・”と定義している。社会との関係が個人の健康の重要な要素なのである。

(3) 四苦八苦 (苦の娑婆)

日本の古くからの言葉 (仏教) で、個人については、生・老・病・死、社会については、あいべつり 愛別離、おんぞうえ 怨憎絵、くふとく 求不得、ごおんじょうく 五陰盛苦などと言われてきた。

(4) 生きがい対象 (P.23)

生きがいの対象は、経済、権力、理論、審美、宗教、愛情 (享楽) に分類される。経済と権力は競争原理 (トレードオフの原理) による。

表-1 シュブランガーとカンドールからの生きがい対象

人名	シュブランガー	カンドール
原理		
競争	経済人	経済型
	権力人	権力型
相乗効果	理論人	真理型
	審美人	審美型
	宗教人	宗教型
	※愛情人	※享楽型

(宮城音弥:「日本人の生きがい」、朝日新聞社、1971) ※のみ異なる

(5) 生きがい感からの“まち”のあり方 (P.51)

人間は生きがい感をもつと気力が充実する。発見、創造、守る、参加、習得の喜びを感じ、生きていてよかったという生存実感により、気力が湧き、やる気が出てくる。生きがい論から導かれる“まち”のあり方は、このような喜びが実感できる“まち”である。

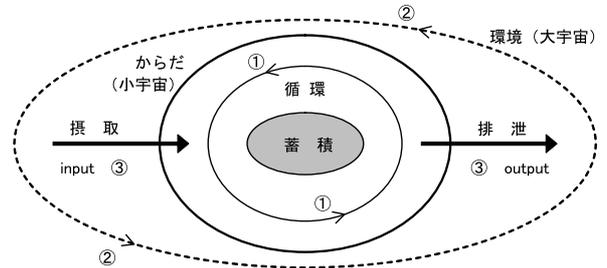
表-2 生きがい感からの“まち”のあり方

生きがい感から気力へ	“まち”のあり方	
①発見のよろこび	気力の充実	①発見のあるまち
②創造のよろこび		②創造性・固有性の顕著なまち
③守るよろこび		③歴史・伝統の蓄積と伝承の持続性のあるまち (後継者のいるまち)
④参加のよろこび		④参加・参画が活発なまち
⑤習得したよろこび		⑤学習・シンポジウムの活発なまち

4. 人間は文明を持つ生きもの

人間は生きものである。食べ物を摂取して、体内で循環、蓄積し、そして排泄する。家庭や地域も同様である。個人や地域という体内の臓器がそれぞれ健全で、うまく脈絡的に機能していれば、力がつき、蓄積ができる。

図-3 生き物と環境 (P.43)

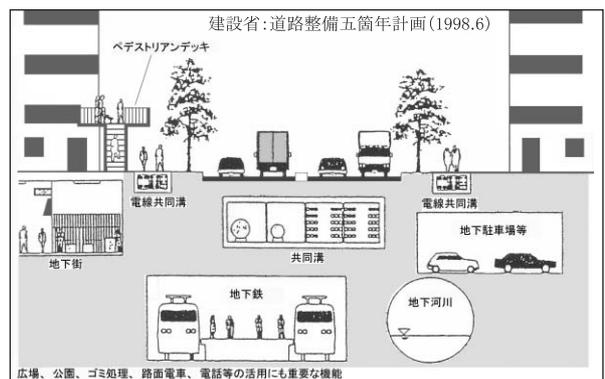


5. 人間は3つの循環系で支えられている

第一は、ものを摂取して排泄するための体内の循環系 (内-内循環系)。第二は、水の循環 (雨 川 海 雲) や空気、海流など、人間の周囲の環境における循環系 (外-外循環系)。第三は、上下水道、電気、物流など、人間が環境から摂取し、環境へ排出するための循環系 (内-外循環系) で、これにより人間は生き、生かされている。(~ は図-3に対応)

第三の循環系こそは、インフラストラクチャーである。図-4に示すように、都市のライフラインは人体のライフラインと対比して説明できる。一方、昭和初期に比べて所得は30倍になり、人も物も大幅に増加した。このため、インフラストラクチャーは頑丈でなければならない。これは、大きな餅を焼くために大きな網が必要になるのと同じである (図-5)。

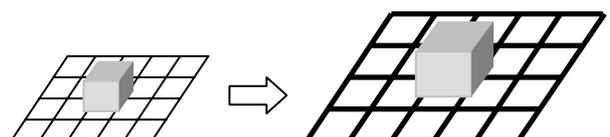
図-4 都市のライフラインと人体のライフライン (P.56)



【人体内の5つの交通】

- 物流・・・消化器系
- エネルギー・・・呼吸器系
- 上下水・・・循環器系
- 防災・・・リンパ系
- 情報・・・神経系

図-5 もち焼き網の理論



6. 創造環境への学と術の体系を考える必要性
 以上の人間に学ぶまちづくりの考え方は、
 学と術の体系において原論に位置づけられる。

表-3 創造環境への学と術の体系

I. 原論	II. 事業の方法論 (企画から経営まで)	III. 理論と手法	IV. 周辺諸学
○			
V. 各種事業論と手法(各論) 1) 時間・空間のサイズ論、2) 事業の多様化、3) 事業の陳腐化 など			

7. 原論の意義・役割

原論には、以下の意義・役割がある。
 本質をつかむ、哲学的にすすめる。
 概念を明瞭に、conceptを明確にする。
 プロは原論を持っている。
 本気になれる、パワーが出る。
 道筋が通せる。自信がつく。
 間違いを犯さない。
 長続きする。
 満足が得られる。
 自分が成長できる。
 原論はセルモーターだ。

8. 事例をスライドで

講演の後半は、以下のテーマでスライドが
 上映され、事例よる具体的な説明がなされた。
 コンセプト(概念)の大切さ(17点)
 人間を見つめて(13点)

重ねの理論(21点)
 用・強・美の三位一体と聖(25点)
 技術と地場産品(7点)
 “ づくり ” という こと(13点) (計96点)
 (文責:「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

■第5回EASTS福岡大会

平成15年10月29日(水)~11月1日(土)
 主催: EASTS福岡大会実行委員会・
 EASTS-Japan(アジア交通学会)
 場所: 福岡国際会議場(福岡市)
 大会テーマ: 「Connecting Asia through
 Better Transportation」

計画・交通研究会が事務局をお預かりしている
 EASTS・EASTS-Japan(アジア交通学会)
 の主催により第5回EASTS福岡大会が開催され
 た。開催式、公開シンポジウム(アジアにおけ
 る高速鉄道の計画と展望)、そして道路・航
 空・海上交通・交通安全などセッションごと
 に分かれて論文と意見交換が熱心になされた。
 参加国・地域は19カ国・地域、約500名。

また、EASTS理事会において、当会副会
 長・アジア交通学会会長の森地茂先生が、
 EASTS(国際学会)会長に選ばれた。

Announcement

研究会・催事の御案内 □

■2003年11月定例研究会

日時: 平成15年11月11日(火)18時~20時
 場所: 計画・交通研究会 会議室
 講師:
 矢島充郎 様 (株)アルメック 第1計画部
 (1975年北海道大学工学部土木工学科卒)
 渡辺明子 様 (株)アルメック 第1計画部
 (1995年埼玉大学建設工学部建設工学科
 卒、1997年同理工学研究科修士課程修了)
 演題: 「ロードプライシング ロンドンの
 状況と東京での導入課題」
 講演概要

1) ロンドンの混雑課金制度

導入経緯/交通戦略/混雑課金制度/施策効果
 2) カメラ方式による規制・課金技術
 ローマ/ロンドン
 3) ロードプライシング関連交通対策
 道路・交通管理/代替手段/駐車マネジメント/その他
 4) 導入後のロンドンの道路交通状況(ビデオ)
 対象区域内/迂回道路
 5) 東京での導入課題
 代替手段/迂回路/駐車対策/時間変更/
 経済的・社会的影響等
 司会: 日本大学 助教授 福田 敦 先生

■2003年11-12月計交研・当て塾共催セミナー

- 第12回 11月12日(水)
第7章 観光の政治・経済・社会(予定)
第13回 11月26日(水)
第8章 観光と地域づくり・まちづくり(予定)
第14回 12月10日(水)
第9章 観光の未来(予定)
第15回 12月24日(水)
第10章 観光の学習・研究(予定)

場所・時間:

いずれも計画・交通研究会鍵室 17時~19時
毎回セミナー第2部として軽い食事とアルコールを楽しみながら討論を行う

■特別講演会・懇親会(立食パーティー)

日時:平成14年12月5日(金)

特別講演会17時~18時

懇親会18時~20時

場所:プラザエフ(主婦会館)四谷駅前

URL <http://www.plaza-f.or.jp> 参照

特別講演会:9階スズラン

懇親会:7階カトレア

特別講演会:

講師:国土交通省総合政策局 技術調査官
藤本 貴也 様

【プロフィール】

S47東大工学部(土木)卒、S47建設省入省、S56同 関東地建道路部計画調整課長、S57同計画局計画官。S59同 大臣官房政策課計画官、S60同 道路局企画課長補佐、S62同 大臣官房技術調査官、H1同 中部地建静岡国道工事事務所、H3同 道路局有料道路課建設専門官、H5同 道路企画課道路事業調整官、H7同 道路局企画課道路経済調査室長、H10同 関東地建企画部長、H11同 道路局国道課長、H13国土交通省道路局国道課長、H13日本道路公団調査役、H14国土交通省総合政策局技術調査官 現在に至る

演題:『美しい国づくり政策大綱』

本年7月に国土交通省が策定した「美しい国土づくり政策大綱」における取り組みの基本的考え方、大綱における具体施策とともに、その後の取組状況等についてご講演いただく。

懇親会

特別講演会に引き続きまして、立食パーティーを行います。会員相互の交流と親睦がはかられれば幸いです。

■恒例視察会

日時:平成16年2月22日(日)~23日(月)

視察箇所:震災復興状況を中心に、神戸市近郊のプロジェクトを視察

詳細は追ってご連絡いたします。

Publication / Documents

刊行物・文献資料

■所蔵文献資料紹介

本会事務局で所蔵している文献資料を順次ご紹介します。ご希望により内容目次のコピーをお送りしますので、電話・FAX・電子メールのいずれかにより、「資料番号・目次コピーの送付先・送付方法(FAX又は郵送)」を事務局までお知らせ下さい。また、事務局

へお越しいただければ閲覧・貸出することが出来ます。

資料番号、資料名、発行元、発行年月
030009 貨物地域流動調査・旅客地域流動調査 国土交通省総合政策局編・運輸政策研究機構 平成15年3月

■会議室等の御利用について

当研究会の会議室、応接室をご利用下さい。
定例研究会や個別研究会の開催時以外は部屋が空いています。会員の皆様はお気軽にご利用下さい。個別研究会等で会議室を御利用になる場合は、取りあえずお電話を下さい。

会議用にはOHP、スライド(Kodak)、液晶プロジェクター(APTi)が有ります。

個別に利用できるデスクがあります。貸し出し用ノート型パソコン(IBM Think Pad)、FAX、電話、コピー、E-mailもご利用いただけます。

なお、会議室は現在利用率が非常に低い状況にあります。どうぞ、お気軽に御利用ください。(別途ホームページにて部屋の空き状況がわかり、申込みも容易にできるようなシステムを検討中)

■個別懇談会のお申し込み

会員各位個別の研究やプロジェクト等につきまして、当会のフェロー会員・個人会員(地域的にも研究部門の面でも多彩な教授・助教授がおられます。既送の会員名簿を御参照下さい)が個別に御相談・懇談に応じます。ご希望により日時を調整しますので、事務局まで遠慮なくご相談下さい。出来れば具体的な研究課題・プ

ロジェクト内容と、希望されるフェロー会員・個人会員のお名前をご連絡下さい。

■原稿の募集

会報に掲載する下記の原稿を募集します。

- ・ **Publication/Documents** : 刊行物・文献資料。
- ・ **Announcement** : 研究会・催事の御案内
会員による講演会等の御案内も随時掲載します。日時・会場・事務局等を明記願います。
- ・ **Report** : 報告

海外研修報告、国際会議参加報告等
原稿執筆上のご注意

原稿のテキストファイルを電子メール(推奨。本文挿入または添付ファイルで)あるいは3.5インチのフロッピーディスクでお送り下さい。ワードプロセッサを使用される場合は、MS-Word形式もしくは一太郎形式で文書ファイルを保存して下さいようお願いいたします。

編集の都合上、400字を1単位としてその整数倍(上限4単位=1ページ分:表題・図表を含む)になるように調整して下さい。2ページ以上に及ぶ場合は御相談下さい。

写真を使用される場合は、プリントされたものを郵送願います。

締め切りは偶数月の15日(必着)です。

計画・交通研究会

会長	中村 英夫
副会長	黒川 洸
副会長	森地 茂
事務局長	窪田 陽一
会報編集委員長	天野 光一
会報編集責任者	橋本 昭夫

〒102-0083

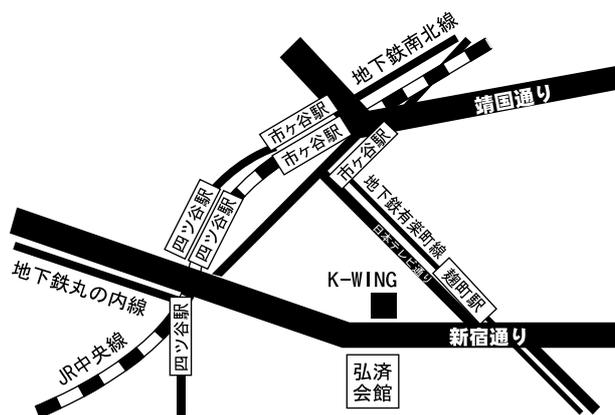
東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774

FAX=03-3221-5489

E-mail = easts@sa2.so-net.ne.jp

Homepage = <http://www008.upp.so-net.ne.jp/keikaku-kotsu/>



計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅下車徒歩5分／営団地下鉄丸の内線四ツ谷駅下車徒歩5分／営団地下鉄南北線四ツ谷駅下車徒歩6分／営団地下鉄有楽町線麹町駅下車徒歩4分